

「憲法 9 条の価値を今こそ」

2015 年 09 月 03 日

「憲法 9 条の価値を今こそ」をテーマに、キリスト教月刊誌『福音と世界』は、安保関連法案の衆院強行採決に抗議してキリスト者は何を語るべきなのかと、11 人の方のコメントを掲載している。11 名の内、4 名が横浜港南台教会で説教、講演をしてくださっている。親しみを覚えて、その方々のコメントを紹介し、私の感想を書き加えたい。

元立教大学大学院特任教授の池住義憲氏は「港南区九条の会」の 7 周年記念集会の講演に来てくださった。「『安全保障』という道を選ばない」と題して、ドイツの神学者・牧師 D・ボンヘッファーの言葉を紹介している。ボンヘッファーはヒトラー暗殺を企てたが、発覚し、終戦直前に絞首刑になった。彼は「安全保障という道によっては、決して平和に到達できない」と書き残している。安全保障の追及は相手への不信があり、不信が戦争を生み出すからである。安全保障の軍事同盟は仮想敵国を想定し、抑止力という緊張の中で危うく保たれている平和である。軍事的に整備された安全保障か、預言者イザヤや主イエスが説いた非暴力、非軍事による平和か。池住氏は「今、キリスト者に問われているのは、この一点です」と書いている。

東北大学名誉教授の宮田光雄氏は伝道礼拝説教に来てくださった。「歴史のアイロニー」と題して、次のように書いている。国会を取り囲み、街頭に溢れ始めた多くの市民、若者や男女の姿は、かつての安保闘争の情景に通じている。安倍政権が押し進める政治手法は憲法が権力を縛る立憲主義の原理について世論の認識を深めた。また、平和憲法下で安逸を貪っていた人々の政治意識に火をつけて、平和憲法の意味を再活性化させた。反動政治が引き起こした「成果」であり、「歴史のアイロニー」と呼んでもよいだろう。確かに、安保関連法案の審議が進む中で、法案に対する認識は深まり、危険であると反対の声は大きくなった。国民の政治への目覚めは政府自民党には脅威になるであろう。

東北ヘルプ事務局長の川上直哉氏は説教と 3・11 被災の報告講演に来てくださった。「何をすべきなのだろう」と題して、次のように書いている。「確かに、生活する一人一人を完全に無視する政治を粛々と進める国家である。そんな国家に軍隊を持たせることの、世界中にとっての、猛烈な不安。70 年前も、そして今も、そうなのだろう。そう思って、ひたすら鬱々としてくる。」川上氏は大学で若者たちに教えている。自分は伝えるべきことを伝えたのかと自問しながら、SEALDs（自由と民主主義のための学生緊急行動）が仙台にも生まれようとしている今、できることを真剣に考えていると言う。

作家の小中陽太郎氏は「港南台九条の会」の発足会の講師に来てくださった。「今こそ紳士君の道を」と題して、次のように書いている。中江兆民は『三酔人経綸問答』で紳士君に言わせている。「陸海軍を撤去し、目に見えない理性を用い、大いに学術を起こして、その国を繊細な美術作品のごときものとならしめ、愛と尊敬を集めて、この国を犯すに忍びないようにさせるべきだ。」一方、豪傑君は積極的に対外進出するのがよいと説いた。日本は豪傑君の方針を取り、取り返しのつかない惨禍をもたらした。そして「今の日本政府は、世界を恐竜や始祖鳥が跋扈する原生林のようなどころだと妄想している」と、時代錯誤の甚だしさを憂いている。

日本は民主主義、立憲主義が危ういところに来ている。主イエスはご自分の命を十字架に献げ、個々人の命を愛し、共に生きよという福音をくださった。主イエスを信じ、従うキリスト者は、今、声を上げ、行動において福音を証する時である。